INMP Newsletter No. 28

September 2019

編集: 安斎育郎、山根和代

翻訳者: 赤松敦子、寺沢京子、山本美穂子、山根和代

International Network of Museums for Peace

ウィーン平和博物館 5 周年記念行事

ブリジット・カーター寄稿

（ウェブスター・ウィーン私立大学大学院修士課程在籍中、ウィーン平和博物館ボランティア）

創立 5 周年祝賀行事の一部として、ウィーン平和博物館(PMV)は、6 月 15～16 日にウィーン中心部にある当博物館で小規模な国際会議を開催しました。この会議は創立者のリスカ・ブロジェットと館長アリ・アーマッドにより組織され、「なぜ平和博物館や平和研究機関は重要なのか」というテーマに焦点を当てました。

一般の参加者、PMV の支援者、協力者の皆さんは様々な国々からこの会議に参加されました。ルーマニア平和博物館の創立者であるマグダレーナ・バタセアは当博物館の創立に漕ぎつける長い道程で協力してくださいました。彼女は PMV のボランティアとしてもずっと活動しておられます。（この次の記事をご参照ください）

同じくルーマニアから参加されたオティリア・ソフロンは自著である『平和と光：広島・長崎』を紹介されました。これはこの主題について書かれたルーマニアで最初の本です。その本の執筆のための学術調査の期間にソフロンは長崎に住み、被爆者から直接話を聞きました。ソフロンは熱心な教育者で、ルーマニアの学校にその著書を 1600 冊も寄付されました。

元々はブルガリア出身ですが現在はベルリンに住んでいるマクシミリアナ・ザバノヴァはメキシコ平和博物館とニューヨーク市平和博物館の協力による研究内容を紹介しました。

6 月 15 日 PMV での小規模会議での講演者：前列左からマクシミリアナ・ザバノヴァ、ブリジット・カーター、ゼルカ・マリヤー、マグダレーナ・バタセア。二列目；アリ・アーマッド、ナヴィン・ジャンガリ、ピーター・ファン・デン・デュンゲン、リスカ・ブロジェット、ファロウク・アザム、ザファー・シャイアン、デイヴィッド・ブロジェット、オティリア・ソフロン（ナヴィア・ジャンガリ提供）

これらの博物館のプロジェクトのために、ザバノヴァは有名なメキシコの建築家・画家・メキシコ平和博物館の創立者で館長でもあるセルジオ・コペリオヴィッチ・エフラトと

密に連絡を取って研究しています。彼女は短いビデオを通して、有名ニューヨーク平和博物館の創立者であるナデット・スタサの仕事も紹介しました。

またもう一つの発表では、ナヴィン・ジャンガリがカトマンズに平和博物館を完成させるという彼の使命について語りました。バルセロナにスタジオを持つ画家で彫刻家であるジャンガリ氏は PMV のグラフィックデザイナーでもあり、当博物館内に展示されている数多くの平和の英雄たちの美しいポスターを制作しています。

PMV の円滑な運営のために他のボランティアの皆さんがしてくださる この上もなく貴重な貢献はザファー・シャイアンの仕事の中で強調されています。シャイアンは月刊のニューズレターを編集し、その他の多くの記事と共に「平和の英雄」のプロフィールの記事を書いています。

私はソーシャルメディアでの PR 活動を維持し、文書を編集し、ウェブサイトとニューズレターのための記事を書くなど様々な仕事を手伝っています。

6 月 18 日に PMV5 周年を祝って:右側に PMV 平和賞の受賞者の一人であるアンネ・シンナヴ・シメンセン)(ナヴィン・ジャンガリ提供)

これらの発表に続いてアフガニスタン教育・難民省の前大臣ファロウク・アザム博士が、調停者・平和伝道者としての自身の仕事について説得力のある基調講演をされました。博士は彼の国で和平交渉を始め、紛争を終わらせるために、タリバンの指導者たち、部族の指導者たち、アフガニスタンとアメリカ合衆国両方の学者や識者と会ったことを回想して語りました。

もう一人の講演者であるゼルカ・マリヤーは女性と子どもたちの人権を守ることに焦点を置いて活動してきたアフガニスタン人の検事で、現在はウィーンに亡命者として住んでいます。

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲンは以前、世界の平和博物館の歴史について素晴らしい講演をしてくださいましたが、当博物館の近くの会場で 6 月 18 日開催された夕方の行事でも講演をしてくださいました。この行事にはおよそ 70 人の方が参加されました。参加者は主に博物館の地元の友の会の会員と支援者の方々でした。参加者の皆さんは素晴らしい音楽の上演、スピーチ、顕著な功績をあげられた方々への「平和の英雄賞」の受賞式から成る祝賀行事を楽しまれました。

当博物館は参加者の皆さんをもてなし、楽しく、記憶に残る創立記念式典を終えました。ウィーンでの創立記念祝賀会の写真をこちら this link で見ることができます。また、短い(90 秒)ですが、多くの情報を提供し、感謝の意を伝える PMV のビデオをこちら here で見ることができます。これは熱心な来館者により撮影されたものです。

(翻訳:赤松敦子)

ルーマニア平和博物館:ウィーン

南東ヨーロッパ初、また初の移動博物館でもあるルーマニア平和博物館が、最近ウィーンで見られるようになりました。8 月の一か月間、平和や基本的人権の保護の強化へと寄与したルーマニアの著名人が、ウィーン平和博物館で紹介されています。

ベルタ・フォン・ズットナー像横のマグダレナ・C・ブトゥッカ、ウィーン平和博物館にて

ルーマニア史における有名な人物は、アレクサンドル・ヨアン・クザ、フェルナンド２世、イオン・ブラティアヌ、二コラエ・ティトゥレスク、ミハイル１世、コルネリウ・コポスです。ルーマニア平和博物館の設立者マグダレナ・C・ブトゥッカは、８月１日発行の報告書で、次のように述べています。「ルーマニア平和博物館の展示物とともにウィーンに来られたことをとても嬉しく思います。関心を抱くウィーン市民や、世界中から訪れる観光客に、ルーマニアの著名人を紹介し、ルーマニア国内だけでなく、ヨーロッパの歴史においても彼らが担った建設的で重要な役割を知る機会を持って頂くことができます。ますます分裂し、行く先を失った現在の世界では、より良い未来のために過去を振り返り、建設的な解決策を探る方へ私たちを導いてくれる、このような努力が必要です。ルーマニア平和博物館のゴールは、平和の維持と強化に貢献している世界中の個人の活動や考え方の展示によって、平和に関する情報を普及させることです。平和の権利は、人間の基本的人権と生きる権利とに密接に関わっているのです。」

また特別展の期間中、ルーマニア平和博物館の活動を支援する海外からの平和活動家や教育者の手助けを受け、学生と市民による平和教育コースが毎日ウィーン平和博物館で開講されています。同時に、マグダレナ・ブトゥッカ主宰の「平和のシンボル」という絵画展も開催されています。

ルーマニア平和博物館の HP は、こちらのリンクからご覧ください。this link.

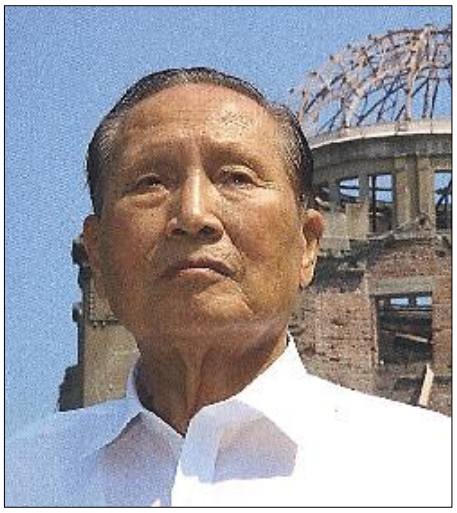
（翻訳：山本美穂子）

広島平和記念資料館の日本人以外の被爆者についての新しい展示

広島平和記念資料館本館が２年間の改修工事の後に４月に再び公開されました。本館展示の中には初めて日本人以外の原爆の被害者に捧げられた新規の常設展示の区画が設けられました。その被害者の数は広島と長崎の両方でそれぞれ数千から数万と推定されています。その大多数はその当時日本の植民地支配下にあった朝鮮半島出身者であったと考えられています。

広島平和公園の中の広島平和記念資料館の近くには慰霊碑があり、その碑文には２万人以上の朝鮮半島出身者の命が奪われたと記載されています。

新展示には日本人以外の被爆者として、ドイツ人、ロシア人、東南アジアや中国からの留学生、アメリカ人捕虜も亡くなったと明示してあります。



広島原爆ドーム近くでの郭貴勲(2015 年撮影)(浜岡学・郭貴勲提供)

展示の中にはその被爆者の体験談や、被爆者となったマレーシアからの留学生、ドイツ人牧師、年配の韓国人の大きな写真もあります。その年配の韓国出身の方は郭貴勲(クワック・クゥイフーン)で、現在 94 歳、当時日本軍に徴集されて広島に 1944 年 9 月に来たのでした。郭は、政府に健康管理手当を払うように命ずる画期的な日本の高裁判決が出た裁判の原告でした。2018 年 3 月時点で被爆健康手帳を持つ外国籍の被爆者は 3000 人以上、その内 2000 人以上は韓国在住で、その他にアメリカ合衆国、ブラジル、カナダ、台湾在住の被爆者もおられます。

改修後の展示で個人個人の被害者/被爆者に焦点を当てることに決めたのは、そうすることで海外からの来館者が原爆の悲惨さをより自分に近いものとして実感する助けにきっとなるだろうという情報の提供があったからです。外国人来館者数は着実に伸びており、今年度の 150 万人の来館者の内の 4 分の 1 に届こうとしています。

日本人以外の被害者の体験談を文書で証明するときに最も重要な問題は資料と情報の不足です。

2019 年 5 月 16 日に撮影された広島平和記念公園内の韓国人原爆犠牲者慰霊碑(共同ニュース提供)

以下の記事もご参照ください。「平和資料館に外国人被爆者の証言を展示」ケイタ・ナカムラ記者による 2019 年 6 月 17 日の共同ニュースの記事:'Foreign hibakusha speaking out as museum dedicates section to them'、「広島平和公園の韓国人原爆犠牲者慰霊碑の悲しい歴史」ジル・ユンヒュン記者による 2016 年 5 月 13 日のハンギョレ新聞の記事'Foreign hibakusha speaking out as museum dedicates section to them'

また、以前 2015 年 11 月発行の INMP ニューズレター13 号 5～6ページに掲載された記事「韓国の平和博物館での展示:韓国人被爆者についての被爆証言」もご覧ください。

(翻訳:赤松敦子)

長崎浦上天主堂に「被爆十字架」が返却される

ウィリアム・P.ショー寄稿

(オハイオ州デイトン国際平和博物館前運営員会議長・オハイオ州ウィルミントン大学理事)

この話はアメリカ合衆国が、1945 年 8 月 9 日に 2 つ目の原爆を投下してすぐ後の長崎に始まります。その原爆は朝の礼拝式の最中だった浦上天主堂を含む長崎市の大部分を破壊しました。およそ 8 万人の人々がこの原爆によって殺されました。浦上天主堂は、東アジアでその当時最も大きいキリスト教の大聖堂でした。そしてそれは爆心地の近くに位置していたのです。この大聖堂は 1959 年に再建されました。1945 年 10 月にアメリカ人兵士ウォルター・G.フックが海兵隊占領軍の一員として長崎に配属されました。敬虔なカトリック教徒だったフックは長崎の司教であった山口愛次郎（洗礼名パウロ）の運転手を務め、二人は友人になりました。ある時、フックが大聖堂の瓦礫を念入りに調べていると、約 1 メートルの長さの木製の十字架を見つけたのです。その十字架はその建物が破壊され焼かれたのになぜか形を留めていたのです。フックは後にインタビューに答えて、山口司教は、アメリカ合衆国の人々にもっと原爆の恐怖を認識してほしいと思い、その十字架を彼に与えたのだと語っています。フックはその十字架を「被爆十字架」と言っていました。

ウィルミントン大学で十字架を展示するターニャ・マウス博士（ウィリアム・P.ショー提供）

その十字架についての記憶はほとんど失われていたのですが、深堀好敏はその十字架のことをよく覚えていました。彼は 1945 年 8 月下旬に撮影されたその十字架が廃墟の中に横たわっている写真を偶然見たことがあったのです。40 年以上の間、彼はその十字架はどうなったのだろうかと考えていました。フックは 1946 年の春に、ニューヨークに住んでいた母親にその十字架を送っていました。母親は家にそれを飾っていました。その家族は何度も引っ越しましたが、その十字架はいつもその家の目立つところに飾られていました。1982 年にフックは（2010 年に 97 歳で他界）、その十字架をオハイオ州ウィルミントン大学の平和資料センターに寄贈しました。そのセンターは日本以外の国で広島・長崎への原爆投下に関する原本資料を最も多く集めている施設の一つです。約 40 年間、その十字架はそのセンターに展示されていました。日本でそれは原爆で失われたと信じられていたのですが、2019 年に平和資料センターの館長で日本近代史の専門家であるターニャ・マウス博士によって「再発見」されたのです。博士はその十字架を返還する方法を探るために浦上天主堂に連絡を取りました。マウス博士は 2019 年に研究のためにそのセンターを訪れたノースウェスタン大学（イリノイ州エヴァンストン）に勤務する日系アメリカ人の学者である宮崎広和博士にこの連絡を助けてもらいました。宮崎博士は長崎大司教である高見三明に連絡を取りました。高見大司教はこの十字架が存在していることを知らなかったのですが、返還の申し出を歓迎しました。

ウィルミントン大学での十字架の祈りの会の参加者（ウィリアム・P.ショー提供）

2019 年 7 月 26 日にその十字架の特別な祈りの会がウィルミントン大学で開かれました。約 50 名がこの会に参加しました。参加者は、主にこの大学のクェーカー教徒のコミュニティの人々でした。その十字架は長崎への返還のために注意深く包装されました。

ターニャ・マウスは、その十字架を持って日本を訪れました。ウィルミントン大学の礼拝堂勤務の牧師であるナンシー・マコーミックと一人の学生もこの日本への旅に同行しました。この十字架は、2019 年 8 月 9 日に浦上天主堂で信者の方々に正式に返還されました。それはこの大聖堂が破壊されて 74 年目の日でした。この行事は国営テレビで日本中に伝えられました。これは市民外交についての話であり、日本とアメリカ合衆国の人々の和解の話であり、希望と平和についての話です。長崎での十字架返還式についての短い NHK のニュース動画がこちらにあります。here

（翻訳：赤松敦子）

広島と長崎のシュモー・ハウス

70 年前、1949 年 8 月に、アメリカのクェーカー教徒フロイド・シュモー(1895-2001)と彼の 3 人の友人は、被爆者とその家族のための家を建設するプロジェクトのために広島にやって来ました。最初の一か月、地元のボランティアの助けも借りて、彼らは 4 軒の家を建て始めました。シュモーと彼のグループは 5 年間毎年夏に日本に来てこの住宅建設プロジェクトを続けました。少なくとも 30 軒(その大部分 21 軒は広島)の家と地域の集会所が広島と長崎でこの 5 年の間に建設されたと推定されています。シュモーは、これらの「平和の家」は原爆が使用されたことを嘆く多くのアメリカ人の善意を表していると言っていました。

フロイド・シュモー(広島平和記念資料館／ブルックス・アンドリューズ提供)

長崎にはその家は一軒も残っていませんが、1977 年にその家の跡地に建設された市営住宅がシュモーにちなんで名付けられ、彼の名前が彫られた銘板が飾られています。それはその取り壊された家の住人からの要望でした。広島では、1951 年に元々地域の集会所として建てられた一軒の家が現存しています。2012 年に道路建設計画のためその集会所を閉鎖する必要がありましたが、その建物は残されることになり 40 メートル先へ移設されました。

広島のシュモー・ハウス
(トレイス・オブ・ウォー＜戦争の跡＞提供)

シュモー・ハウスは今は、原爆投下後広島を助けるために海外から来た人々について伝えるギャラリーになっています。(アメリカ合衆国出身のノーマン・カズンズとバーバラ・レイノルズ、赤十字国際委員会の駐日主席代表だったスイス人医師マルセル・ジュノーらについて展示してあります)

2012 年からそのシュモー・ハウスは広島平和記念資料館の別館となり、資料館の近くに移設されました。資料館はより多くの方々にこの家を訪れていただき、シュモーについて知っていただきたいと希望しています。シュモー・ハウスでの展示と広島・長崎両市のシュモー・ハウスに以前住んでいた人々と連絡を取っているボランティアの小団体の研究をきっかけに、近年シュモーについての関心が再度高まってきています。

こちらの最近の記事により多くの情報が掲載されています。9 月 2 日ジャパンタイムズ掲載のケイタ・ナカムラ記者による記事「被爆都市に生き続けるアメリカの平和主義者の知られざる遺産」'American pacifist's little-known legacy lives on in A-bombed cities'こちらのリンク this link で、シュモー・ハウスの 4 枚の写真を見ることができます。

2001 年 4 月 24 日にシアトル・タイムズに掲載されたマーク・ラミレズ記者によるフロイド・シュモーの平和主義者としての人生と仕事についての詳しい深い感銘を与える追悼記事は、こちらで読むことができます。「第一線で活躍した活動家であったシアトル平和公園創設者 105 歳で他界」'A prime activist: Creator of Seattle Peace Park is dead at 105'

シュモーは 1983 年に広島市から特別名誉市民の称号を贈られ、勲四等瑞宝章受賞者にも選ばれました。ノーベル平和賞の候補者としても数回選ばれています。こちら here により多くの情報が掲載されています。こちら here のリンクもご覧ください。

(翻訳:赤松敦子)

記憶の駆け引き:博物館の語りにおける証言の役割ー国際博物館会議(ICOM)京都大会

コウディ・ハウカ寄稿

(京都在住のフリーランスジャーナリスト、研究者。最新の科学技術がどのように人間関係を変えるかと、科学技術による意見発表の場の報道、市民の談話、民主主義に対する影響に興味を持ち研究している。)

国際博物館会議(ICOM)京都大会 2019 のバナー(ICOM 提供)

「博物館は記憶のしもべです。」ケープタウンのディストリクト・シックス博物館館長であるボニータ・ベネットは国際博物館会議(ICOM)京都大会 2019 の総会でこのように語りました。「しかし博物館が使うその力のために、博物館は植民地主義の歴史上の管理人になり、また記憶の慣習的行為に決定的な役割を担うことになります。」

これは ICOM 京都大会の 2 日目に同時に行われた二つのセッションの核心にあった緊張状態のことでした。そのセッションでは植民地化と戦争犯罪が博物館でどのように表現されるかについて討議したのです。これらのセッションでは、はっきりした全体的な問題を扱う一方で、博物館は帝国主義の下で生きた人々の語った言葉の展示を増やすことを通してもっと全人的な語りを

積極的に構築する必要があることを強調することを目的としていました。このテーマは、日本の帝国主義国家としての歴史と、日本の博物館が、日本が植民地化していた国々の観点からの人々の声を展示から除外する傾向があることを考えると、特に京都で開催された大会にとって心がひどく痛む話題でした。

公共に対する犯罪犠牲者追憶のための記念博物館国際委員会(ICMEMO)と国際人権博物館連盟(FIHRM)の「博物館は日本帝国の植民地支配下に置かれた国々からの底知れない悲しみの声をいかにして伝えるか」という題の合同セッションでは、二人の講演者が日本帝国支配下で生きた台湾と沖縄の一般市民の観点に光を当てるために博物館において証言が重要であるということについて話しました。

日本学術振興会外来研究員秋山かおりは、沖縄県平和記念資料館とひめゆり平和祈念資料館による第二次世界大戦中の沖縄戦での一般市民の体験と観点を詳述するための証言使用の事例研究について発表しました。

沖縄県平和記念資料館の一般市民の証言展示室の一つ(沖縄県平和記念資料館提供)

これらの展示には直接一般市民から聞き取った体験の詳細を記載した書籍、証言者の写真、沖縄の人々が耐えた当時の恐ろしい状況を再現した模型が含まれています。秋山はこのような展示には、特に沖縄のように広範囲の火災と破壊の結果、実物資料が実質的にほとんど存在しない場合、口述歴史資料を入れることが重要であるということを強調しました。

秋山はこのように語っています。「私たちは証言に頼らなければなりません。それがどのように評価されるかは議論の分かれるところですが、博物館は一般の人々がその評価を決められるように多くの証言を提供することはできます。」また彼女は更に、実物資料がないということが、日本の博物館が帝国主義であった過去についての語りを展示から除外することを正当化してきた理由の一つであり、その結果展示に他国の観点を入れないで日本側の語りのみ展示し続けるという結果になったということも示唆しています。

沖縄で従軍看護訓練を耐えた少女たちの写真
(www.okinawa-information.com 提供)

同様に、国立台湾歴史博物館公共奉仕部門研究補助員リン・チアイーはその発表で、1895 年から 1945 年の日本の台湾支配に関して再考するために証言者研究グループの利用について分析しました。その発表のタイトルは「誰が語っているのか:第二次世界大戦時の台湾人の計り知れぬ深い悲しみの記憶」でした。 10 人のグループ参加者が、帝国支配が終わったというニュースに対する反応の記憶を分かち合いました。その参加者たちはそれまで博物館や研究所からは無視されてきた様々な複雑な感情や観点について例を挙げながら説明しました。これらの例は、記憶と、どのように記憶が記録され、捏造され、広められるかという

ことを決定する政治的システムとの駆け引きの中で重大な関係性が形作られるという証拠を提供することになりました。その構造と、この中に内在している組み立てられた語りは本質的に博物館が演じてきた、また社会で果たそうと努力してきた教育的役割に繋がっています。ICOM 職業倫理規定 ICOM Code of Ethics for Museums でもこの教育的役割について触れられています。この理由で、文化遺産の独立に伴う失われた記憶の民主化は、今年の ICOM のより大きな焦点に言及する関連問題です。今年の ICOM では前進する博物館の定義、使命、大志を検討したのです。

国立台湾歴史博物館（国立台湾歴史博物館ウェブサイト提供）

植民地からの独立と賠償」に関するセッションの中で、「間違った方向に向かったことについてどのように話すことができますか」と ICOM ドイツのベアテ・レイフェンシェイドは質問しました。「私たちはこれらの物語を語ること、そして語らないことによる倫理的な影響について考えなければなりません。」

実際、集団記憶喪失症―それは意図的な語りと声の抑圧ですが―その問題を認識することは、おそらく現代社会における博物館の役割と、共有する経験における博物館の占める位置のイメージを再構築する過程において等しく重要なことです。多くの ICOM 参加者がこの意見に賛成のようでした。しかしこの大会で提案されている博物館の定義とちょうど同じように、より大規模に理論を実践に移すことが博物館にとってやりがいのある仕事になるでしょう。

この意見はケンブリッジ大学で研修を受けた考古学者でケニア国立博物館の前館長であるジョージ・オケロ・アブンゴが直接指摘した点にも表れていました。「歴史がその傷と不正を癒してくれて、時間が過去の記憶を消してくれると期待して、博物館の大多数はまだ植民地記憶喪失のふりをしています。」とアブンゴは提案された博物館の定義についての討議で発言しています。「私はずっと情報を集めてきましたし、研究してきましたし、調査もしてきました。私の声はこの新しい定義に含めていただけますか。」

（翻訳：赤松敦子）

広島は警告する―今も！ニュルンベルク平和博物館での芸術展示

5 月 16 日から 8 月 9 日（長崎原爆忌）までドイツのニュルンベルク平和博物館は片岡脩教授によって描かれた平和ポスターの展示を行いました。片岡教授は 1932 年に広島に生まれ、奇跡的に広島市への原爆投下を生き延びました。東京藝術大学で美術を学び、自分のアトリエを設立し、1968 年には愛知県立芸術大学の教授に任命されました。彼の被爆体験と原爆の放射能のために度々病気になったことが彼を一連の平和ポスターの制作に向かわせました。その平和ポスターは、1985 年に広島で初めて展示され、世界中の様々な都市で展示されてきました。

ニュルンベルクでの展示は、その平和ポスターを整理してまとめられたものに関わっています。片岡は 1997 年に癌で亡くなりました。2008 年に彼の妻であった片岡恒子

は彼の芸術作品(32 枚のポスター)をドイツのフュルス市に寄贈しました。この市は 1986 年から広島と長崎の姉妹平和都市になっています。

展示会の葉書

ニュルンベルク平和博物館は同じ展示をすでに 10 年前 2009 年の夏に開催しています。その後 10 年の間に、特に近年核兵器の使用の危険が迫り、核兵器を制限する条約が破棄されています。この展示では原爆の犠牲者のことを思い出してもらい、核兵器が存在し続けることが意味する大変な危機に注目を集め、核兵器のない世界の未来像を描くことを促進することが意図されています。この博物館の収蔵品である他の遺物と共に、広島と長崎の原爆の大判の写真がこのポスター展示に資料を補っています。

こちらのリンク this link にこの展示の詳細が紹介されています。(ドイツ語)

(翻訳:赤松敦子)

ウィルミントン大学の平和資料センターへの支援、オハイオ

オハイオ州ウィルミントンにある平和資料センターは、日本以外では最大級となる、第二次世界大戦の原爆に関する資料 40,000 点(上記の記事もご参照ください)を有しています。

平和資料センターは、核戦争の恐怖に感化された非暴力運動家や、広島と長崎の被爆者の歴史的な体験の証言者となることで、平和への貢献に努めています。先頃センターは、環境保護をチェックする機器と新しい棚のため、全米人文科学基金から 10,000 ドル近くを授与されました。そのことにより、収蔵されている貴重な本や写真、資料を将来にわたり保護することができます。名誉ある賞の授与によって、センターの資料の完全デジタル化が可能になると期待されています。詳細は、こちらからご覧ください。here.

資料保護のための賞を獲得した、平和資料センターのターニャ・マウス博士

(翻訳:山本美穂子)

イ・ジュン平和博物館（李儁烈士記念館）記念式典

7 月 11 日、ハーグのイ・ジュン平和博物館（李儁烈士記念館）は、第 2 回ハーグ平和会議（万国平和会議）に不当に参加を拒否され、非業の死を遂げた韓国人の外交官イ・ジュンを記念する恒例の式典を開催しました。この式典は、イ・ジュンが 1907 年 7 月に亡くなった旧ホテル・ド・ジョンで、現在はイ・ジュン平和博物館の大きな記念ホールで開催されました。各国から 170 名に及ぶ参加がありました。式典の議長は、オランダ韓国人会の会長キョンヒ・ハンが務め、記念講演は Y.Y.リ韓国大使が行いました。

7 月 11 日イ・ジュン・アカデミー基金の会長キー・ハン・リ氏によるオープニングのあいさつ

他の主要な参加者として、オランダの韓国商工会議所所長 C.S.クワック氏、韓国学友会会長 Y.R.キム氏がありました。プログラムは献花、イ・ジュン氏の遺したものの朗読、室内楽の演奏も行われました。

（翻訳：山本美穂子）

式典の合間の合奏

オーストラリア・リビング平和博物館

オーストラリア・リビング平和博物館（ALPM）は、オーストラリアの平和創造、非暴力による社会の変化、戦争と暴力への対抗の新しい形を示す、オンラインの博物館です。博物館は、過去と現在の個人と団体による、多くの学問領域での（学際的な）平和の努力を振り返りながら、平和の文化を育成することを目的としています。ボランティアが主体の、地域に根差した博物館です。

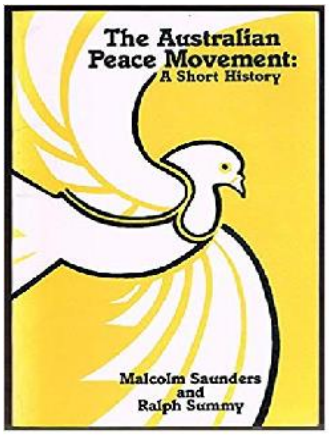
最近の展覧会には、以下のようなテーマがありました。オーストラリアのピース・メーカー（過去から現在までの個人とグループ）、オーストラリアが参戦した戦争への抵抗（ニュージーランド戦争：マオリ戦争、第一次世界大戦、ベトナム戦争）、戦争のからくり（例；武器貿易、外国の基地）、平和の実践（平和の芸術を含む、ウィリアム・ケリーのオンライン展覧会と共に）、平和キャンペーンの振り返り；その他のオンラインの平和展（婦人国際平和自由連盟オーストラリア支部の 100 周年展を含む）。

博物館の必要性を説き、支援と資金援助を訴える 2 つの短いビデオ（2014 年）は、こちらとこちらのリンクからご覧になれます。here and here.

オーストラリアの主要な平和主義者で婦人賛成論者のビーダ・ゴールドスタイン、1912 年(提供:T・ハンフリー&Co.／ビクトリア州立図書館)

ALPM の設立の根底にある哲学についての素晴らしい記事が、Mayela Reyes とロドリゴ・サンチェスによって書かれました。「オーストラリア・リビング平和博物館を通してサバルタンの歴史を語らせよう」が、「新しいコミュニティ」2016 年第 14 号 No.3、53～55 頁でご覧になれます。彼らは、博物館の主な特徴の一つに、オンラインを基本として、高いレベルの協力と相互性を可能にすることを挙げています。また彼らは、博物館は、時に国や公が語るもの(植民地主義とその影響の再考を含む)を修正し、補足する、教育のためのインフォーマルな資料として、重要な役割を担っているとも述べています。その記事はこちらからダウンロードできます。

here.



この本は、オーストラリアの平和運動史の概要を紹介しています。1885 年から現代までの平和に関するさまざまな活動を扱っています。

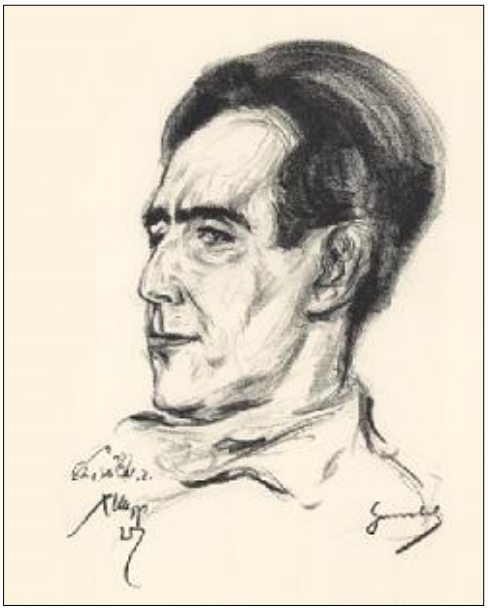
(翻訳:山本美穂子)

エミール・ユリウス・ガンベルについての展覧会、ハイデルベルグ大学の博物館にて

※ニューズレター第 27 号、4～5 頁参照
2019 年 6 月

ハイデルベルク大学の博物館で
7 月 22 日から 10 月 19 日まで開催

ハイデルベルク大学は、ワイマール共和国の批判とユダヤ人であることを理由に、早くも 1932 年にガンベルを追放し、彼をアメリカ亡命へ追いやった大学です。展示の中には、大学のアーカイブからの貴重な資料もあります。展覧会のオープニングでは、アーカイブを会場に丸一日講演会がありました。彼の生涯と成し遂げた研究のさまざまな面の発表や、高く評価されていた統計学者が、どのようにナチの敵対者として恐れられる存在となったのかという疑問も取り上げました。



Emil Stumpp による E・J・ガンベルの肖像(提供:ハイデルベル大学アーカイブ、Stumpp についての記事は 2016 年 12 月 INMP ニューズレター第 17 号 12～13 頁参照)

講演会は、デイビッド・ラフ(David Ruf)が制作した、ガンベルについての新しいドキュメンタリー映画(1時間)の上映で締めくくられました。講演会の写真や、展覧会のたくさんのイベントへのリンクは、大学アーカイブの HP からご覧になれます。こちらの記事「平和主義者に対する戦争—ワイマール共和国で“ガンベルのケース”は ハイデルベルク大学に衝撃を与えた」(ドイツ語)もご参照ください。

ハイデルベルクで初めてのガンベルの展覧会は、ガンベルに賠償や謝罪を負う大学が、素晴らしい研究者を歓迎したと同時に、遅すぎた表彰でもあります。しかし 1991 年には、彼の生誕 100 周年を受けて、大学は記念に出版を行いました。展覧会の開催数日前に放送された、ガンベルについての 4 分間のラジオ番組では、彼の肉声を聞くことができます。

(翻訳:山本美穂子)

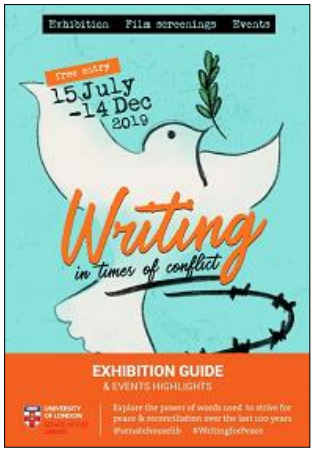
「紛争時の文書」展(ロンドン)

7 月 15 日～12 月 14 日、ロンドン大学のセナート・ハウス図書館（大英博物館の後部入口の向かい）で、小規模ながら豊かな内容の展示が行われました。「紛争時の文書」展で、過去 100 年間にわたり、紛争に対して平和や正義を求めた人々の、言葉の力を示した展示です。

第一次世界大戦直後の文書から始まり、ベルサイユ条約(1919 年)の複写や、それに対するジョン・メイナード・ケインズやノーマン・エンジェルの批判書があります。最近の文書には、2019 年の「絶滅への反抗」のチラシや、グレタ・トゥンベリさんの本『変化を起こすのに、小さすぎることなどない』もあります。

本、パンフレット、ポスター、手紙、写真、素描など、100 以上が展示されています。アート、人文学、社会科学系大学図書館の、豊富で国際的な収集品から集められました。アフリカ、ラテンアメリカ、ヨーロッパの作家、ジャーナリスト、政治家、活動家、そして地域コミュニティによる文書で、4 つの主なテーマに分類されています。「平和を求める文書」「戦時下の文書」「亡命からの文書」そして「抗議する文書」です。入場は無料で、包括的でイラスト付きの、約 50 頁の優れた展示ガイドも受け取れます。このサイトからも、ダウンロード可能です。

さらに情報を知りたい方は、このサイトでどうぞ。また、4 分ビデオは、ここで見ることができます。展示ガイドの最後の数ページには、世界の女性活動家たちが紹介されています。貴重なウェブサイトに基づいていますが、日付ごとに（その日生まれた）女性活動家が紹介されている印象的なカレンダーも含まれています。



展示ガイド

(翻訳:寺沢京子)

「平和をどう写すか」(ローマ)

アルフレート・フリート写真賞は、2014 年に創設されました。平和な世界を求める人々の努力や、生活の美と善を探求する姿を撮る世界中の写真家を認め、奨励する賞です。私たちの将来は平和的共存に在るのだという考えを、うまく表した写真家たちに賞が与えられるのです。(INMP ニューズレターNo.15、2016 年 6 月号「平和のイメージ年間賞」もご覧ください)

第 6 回の写真賞(2019 年)には、中国、インド、ロシア、アメリカ、そしてドイツなど、113 の国々から 17,000 もの写真が応募されました。国際審査員が選んだ 25 の候補写真を、このサイトで見ることができます。

2019 年度の授賞式は 9 月 12 日に、ウィーンのオーストリア議会で行われます。2 週間後には、ローマのオーストリア文化フォーラムで、2018 年度の受賞写真展があります。(10 月 18 日まで)

「平和をどう写すか」という問いに取り組んだ、40 ほどの受賞作品や最終候補作品が展示されます。ローマにあるスイスやドイツ学校の高学年の生徒が、開会の準備をします。若い彼らが授業で、展示写真について議論し探求するのです。2019 年度の「子ども達(14 歳以下)の平和のイメージ」は、このサイトで見ることができます。

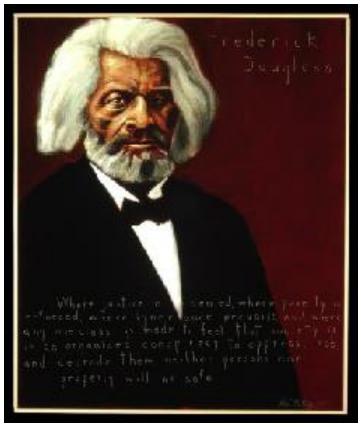
水中で自由を発見する
(credit:アンナ・ボイジアス)

2018 年度のアルフレート・フリート写真賞の受賞者はアンナ・ボイアジスでした。彼女は「水中で自由を発見する」という一連の写真を応募しました。アフリカ東沿岸のザンジバルの女性の姿ですが、彼女たちは水泳を学んでいます。男性が支配するイスラム社会では禁じられていることですが、彼女たちは解放と自由の行為に果敢に取り組んだのです。詳しい話や写真は、このサイトでご覧ください。

(翻訳:寺沢京子)

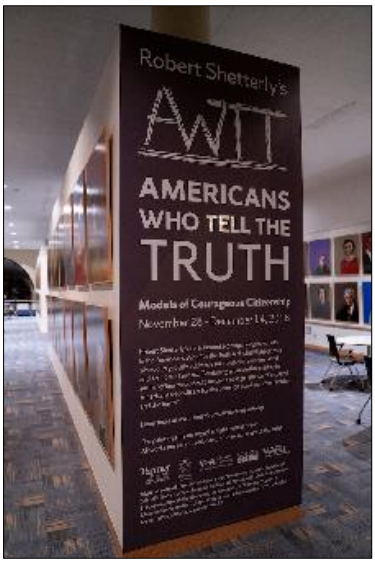
真実を語るアメリカ人の展示:アメリカにて

2001 年 9 月 11 日のニューヨーク市での攻撃を受けて、米国のアーティスト、ロバート・シェターリーは、過去と現在において仲間のアメリカ市民で彼にインスピレーションを与えた肖像画(物語付き)を描くプロジェクトを開始しました。この新しく生み出された「*真実を語るアメリカ人*」の肖像画シリーズは、描かれた個人の印象的な言葉の引用があり、木製パネルに印刷された 230 人以上の肖像画となりました。絵画は、芸術アカデミー、文化センター、図書館、博物館、学校などで展示することができます。2012 年に開始された巡回展は、公民権、先住民の権利、平和の作り手、女性の権利、労働者の権利、環境、メディアなどのような特定のテーマを中心に構築されることがよくあります。また訪問者にインスピレーションを与えるような一連の個人に関する展示物もあります。



アメリカの奴隷制度廃止をした偉大な人物、フレデリック・ダグラスの肖像（写真提供：Robert Shetterly）

展示会は幅広い組織によって主催されており、これまでに 26 州とワシントン DC で展示されています。展示会に関連して、ロバート・シェターリーは講演やワークショップの開催をすることができます。展示会は時々「アメリカの内部告発者ツアー」、または「勇気ある市民的行動の模範的人物」と題されています。ギャラリーだけでなく、約 25 のテーマはここで見ることができます。テーマのいずれかをクリックすると、あるテーマに関連付けられている個人の肖像画があり、選択できます。肖像画のポスターの複製を購入することができ、個人およびテーマに関連する無料のレッスンプランは、この素晴らしい Web サイトで入手できます。これは若者から高齢者までを対象としており、全く独創的で刺激的な教育プロジェクトであり、他の国のアーティストが同様のプロジェクトに着手するきっかけになるはずです。現在、リチャード・ケインによってロバート・シェターリーと彼の作品に関するドキュメンタリー映画が制作中であり、募金活動が進行中です。映画についての刺激的な 3 分間のビデオ−「ロバート・シェターリー：真実を語るアメリカ人」−は、この非常に有益なウェブサイトで見ることができます。また 4 分間のインタビュー（今後の映画の一部）では、彼のプロジェクトの背後にあるアイデアを議論し展示しています。



ニューヨーク州、シラキュース大学のマックスウェル市民社会学部での最近の展示

（翻訳：山根和代）

ベルタ・フォン・ズットナー・スクエア 70 周年を祝うボン市

第二次世界大戦とドイツの分裂、その首都ベルリンの後、1949 年から 1990 年まで、ボン市は西ドイツの暫定的な首都でした。1949 年 8 月 5 日、激しい議論の末にボン市議会は、ライン川に架かる橋の近くに新しく造られた中心地のスクエアをベルタ・フォン・ズットナーと名付けることを決めました。

ベルタ・フォン・ズットナー・トラム
（提供：Frans Valenta）

新たに造られたスクエアは、戦争によって激しく損傷した町の一部に代わるもので

した。そこは毎日何千という人々が行きかう、市の交通の主要な場所の一つとなりました。またそこは、世界中から多くの観光客が訪れるベートーベンの生家(ベートーベン・ハウス)からもとても近いです。ボン市は(そして世界が！)、来年のベートーベン生誕250周年を祝う準備をしています。(こちらをご参照ください)(see here).

ベルタ・フォン・ズットナー・スクエア(市の平和への責任を象徴する)の命名 70 周年を記念し祝うために、ボン女性平和ネットワークと平和協力ネットワークは、市の援助を受けて、想像力に富んだプロジェクトを行っています。

9 月 21 日(国際平和デー)には、“ベルタ・トラム”が始まり、一年間市内を走ります。このプロジェクトは、トラム本体にベルタ・フォン・ズットナーの肖像や文字を入れるのに10,000 ユーロ(約 120 万円)かかりました。

再建され命名される前の破壊されたスクエアの様子、1948 年～1949 年
(提供：Paul Kersten／ボン市アーカイブ)

その他のサポートプログラムとしては、8 月 28 日から 10 月 31 日まで、移動展覧会「ベルタ・フォン・ズットナー―平和のための生涯」が、スクエアの歴史的な写真とともに、ボン市役所のロビーで展示されています。また 8 月の間、ボン市のアーカイブは、ズットナーやスクエアの展示を行いました。

またボン市の女性博物館では、1954 年の彼女についての映画(「世界の心」)が上映され、教育省は、彼女の有名な小説『武器を捨てよ(Lay Down Your Arms)』の出版130 周年を記念した講演を行いました。

女性平和ネットワーク代表の Heide Schütz。8 月 28 日ボン市役所のベルタ・フォン・ズットナー展オープニングにて

また、女性平和ネットワークのおかげで、6 年前の 2013 年 9 月 21 日には、ズットナーの彫刻がスクエアでお披露目されました。2019 年 6 月 18 日に同ネットワークは、花や旗を彼女の彫刻に飾り、スクエアの 70 周年をお祝いしました。カラフルな写真はこちらからご覧になれます。click here. 詳細(ドイツ語)は、以下のリンクからご覧ください。here and here.

(翻訳：山本美穂子)

ウィーンの抗議徒歩ツアー

ウィーンの抗議徒歩ツアー(Wiener Protestwanderung)は特に若者が、過去にどんな普遍的な人権のために人々が戦ってきたか、人々がどのように組織を作り、多くのことを達成してきたか、どのようにこれら

の運動やその成功がこの街の今日の状態に影響を与えてきたかを学ぶ機会となります。それらの抗議に関連のある場所、特に抗議運動がなければ存在しなかったであろう場所に QR コードが記されています。スマートフォンでその QR コードを読み込むと、説明文、写真、動画、音声記録などにアクセスでき、その人権に関連のある場所の重要性についてより多くのことを学ぶことができます。このプロジェクトは特に歴史と政治の教育に役に立ちますが、より広く応用できます。このシステムは「ポリス」(学校で政治を学ぶこと)センターと、この説明文の著者マーティン・アウアーの主導で完成しました。このアプリケーションは首相官邸、連邦教育科学研究省、ウィーン市、ウィーン応用美術大学など多くの支援団体から経済的支援を受けて完成させることができました。

ダウンロード可能な 44 ページのツアーの冊子

このツアーに持っていくための教員や若者、その他の人々向けの冊子(44 ページ)にはそれぞれの場所についての基本情報が掲載されています。また、このツアーの事前準備についてのヒントとツアーの後でその体験を最大限に活かすための方法も載っています。こちら here からその冊子の pdf ファイルがダウンロードできます。

説明されているそれぞれの場所はこちら here から見ることができます。

このツアーは 18 か所の訪問場所から成っています。それらはウィーン市内にある、権力者や政府に対する反乱や抵抗のような出来事、女子のためのギムナジウム(大学進学者のための中高等学校)を創立することを求める運動、LGBT の権利・労働組合の権利・公共交通機関・市民のラジオ局・亡命の権利を求める運動、原子力発電所に反対する抗議運動、などに関する場所です。また、ウィーンのリング通りと国会議事堂は抗議や運動によく使われる場所ですので、このツアーに含まれています。家族計画と中絶の権利を求める運動について詳細を伝えている博物館も入っています。こちら click here とこちら here により詳しい情報が掲載されています。(ドイツ語)

(翻訳:赤松敦子)

寛容の船

「寛容の船」は言語や芸術を通して、様々な大陸や文化や独自性を持った若者を繋ぐ想像力に富む教育プロジェクトです。この船の帆は様々な民族的・社会的背景を持った何百人もの地元の学童によって描かれた絵が縫い合わされており、平和・寛容・希望のメッセージを伝えています。この船の創造に参加することによって、子どもたちは様々な文化や考え方を尊敬することについて学ぶのです。子どもたちはこの船の建設を見学し、大工仕事を学ぶ若い実習生たちと出会います。子どもたちによって描かれた絵の中から素晴らしい作品として選ばれたものは巨大な帆を形作るのです。その帆はその船が完成した時に掲げられるのです。その船の出航の時、このプロジェクトは最高潮を迎えます。それは参加者にとって

喜びとお祝いの雰囲気を創り出し、関わってくれた地域社会に対する大きな興味と話し合いの機会を生み出します。この全部の過程は 3～4 週間かかり、世界中の多くの様々な場所で 10 回以上展示されます。

最初の「寛容の船」はエジプトのシワで 2005 年に建設されました。それ以来、この船は世界中の他の都市、例えばハバナ、モスクワ、ニューヨーク、ローマ、ベネチア、最近ではロンドンで建設され展示されてきました。ロンドンではテート国立近現代美術館近くのテムズ川で 9 月 4 日から 10 月 6 日まで展示が行われています。そこで「すべてテムズ 2019」という年に一度のテムズ川のお祝いのお祭りの一部として展示されているのです。この祭りは人の心に刺激を与え、人と人を繋ぎ、人の心を奪うような創造的で多様なプログラムで祝われるのです。

「寛容の船」提供

このプロジェクトは、イルヤとエミリア・カバコフ財団によって始められました。この財団は現代のロシアの二人の有名な芸術家にちなんで名付けられました。この財団は多様な文化の間のコミュニケーションと協力のための手段としての芸術を促進することを目指しています。また、同時に、若い芸術家を育てることも目指しています。より詳しい情報がこちら click here とこちら here にあります。

美しく色とりどりのギャラリーをこちら here で見ることができます。また、短い優れた動画集をこちら this link で見ることができます。その中にはエミリア・カバコフのこのプロジェクト全体についての話（2 分間）も含まれています。

（翻訳：赤松敦子）

写真提供：「寛容の船」

新刊案内

(1)『核兵器はいらない』：ビキニ環礁での核実験を忘れない

平和のための博物館・市民ネットワーク通信『ミューズ』2019 年 6 月号に「ビキニ環礁での核実験から 65 年：第五福竜丸は放射能に曝された唯一の船ではなかった」という興味深い記事が掲載されていました。『ミューズ』No. 39, pp. 13-14 英語版はこちらにあります click here)この記事は高知にある平和資料館・草の家の副館長である岡村啓佐によって書かれたものです。彼はその著書『NO NUKES ビキニの海は忘れない』で 1954 年 3 月から 5 月に太平洋のマーシャル諸島ビキニ環礁でアメリカ合衆国によって行われた 6 回の水爆実験の犠牲者の人々について語っています。放射能汚染がおよそ 1000 隻の漁船の乗組員とその釣りあげた魚に悪影響を及ぼしましたが、この悲劇の広がりは 60 年間ずっと秘密にされてきました。この本には、約 50 人の漁師の証言がそれぞれの証言者の1ページ大の印象的な写真と共に掲載されています。

第五福竜丸の話はよく知られていますが、事実を記録した心を動かす力強いこの書籍には同じように放射能の影響を受けた 20 隻以上の他の船に乗っていた核実験目撃者の証言が記載されています。(日本語に英語が併記されています)またこの本はどのようにして 1985 年に初めてこの全ての話が明かされたのかも詳しく説明しています。高知県の高校生と教員の調査と面談の後に初めてこの被爆の体験談が語られたのです。(しかしこれは、政府によってさっさと片付けられてしまいました。)この本には高知県知事からの出版を祝うメッセージが掲載されています。ピースボートと核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)の共同創設者である川崎哲の優れたアピールも載っています。そのアピールは、一般大衆に世界中にいる核実験被害者に対してもっと意識を向けてもらうこと、被害者の人権を守る戦いと彼らが必要としている援助のための活動を支援すること、そして市民として核兵器禁止条約の締結を促進するための行動を起こすことを訴えています。この 20 年間、岡村啓佐は核兵器の被害者に関して、展示会を開催するだけでなく、他の写真集も出版してきました。

この本は、山根和代も編集者・翻訳者の一人ですが、電子メールで平和資料館・草の家に注文することができます。

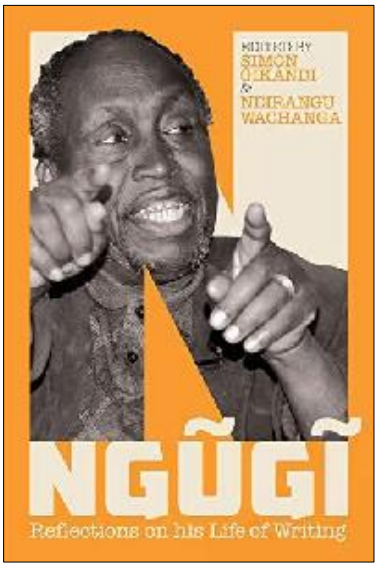
こちらがそのためのメールアドレスです。GRH@ma1.seikyou.ne.jp　またアマゾンのこちらのページ Amazon でも注文できます。

(翻訳:赤松敦子)

(2)『ングリ:その作家人生の回顧』

『ングリ:その作家人生の回顧』はングリ・ワシオンゴの 80 歳の誕生日を祝ってその人生と作品を回顧する、サイモン・ギカンディとンディラング・ワチャンガによって編集された小論集です。ングリは 20 世紀アフリカ出身の最も偉大な作家で、彼の人生のいろいろな段階が友人、彼の作品を賞賛する人々、同僚によって回顧されています。その中には、彼がナイロビ大学で 1970 年代に教えた学生や、彼の 1980 年代の亡命期間の政治仲間、彼が 1990 年代にアメリカ合衆国で新しい生活と仕事を始めた頃に、彼と仕事をした人々が含まれています。

1970 年代には前 INMP 理事のソルタン・ソムジーもングリが書いた劇を上演するために地方の劇場で一緒に仕事をしていました。



ケニアの大統領ジョモ・ケニヤッタはその劇を上演禁止にし、彼らが建てた野外劇場を破壊し、その作家ングリを拘留しました。『ングリとの仕事』という本への長文の寄稿で、ソムジーはングリの地方の劇場に刺激を受けて、どのように人々に基本を置いた村の平和博物館を始めたかについて描写

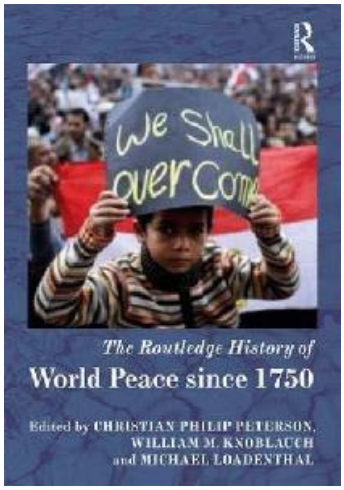
しています。その平和博物館は紛争の間も紛争地域の様々な民族の若い男女が対話を創り出し、互いの伝統について学ぶ市民社会のスペースとなりました。これらは中央の権威とは独立して、地域社会と先住民族の紛争解決の遺産を維持していく伝統でした。

今年の始めにこのケニア人の作家ングリは、ドイツのオスナブリュック市で 2019 年エーリッヒ-マリア-レマルク平和賞を受賞しました。トランセンド・メディア・サービスの記事がこちら here にあります。

（翻訳：赤松敦子）

(3)ラウトレッジ社版 1750 年以降の世界平和の歴史

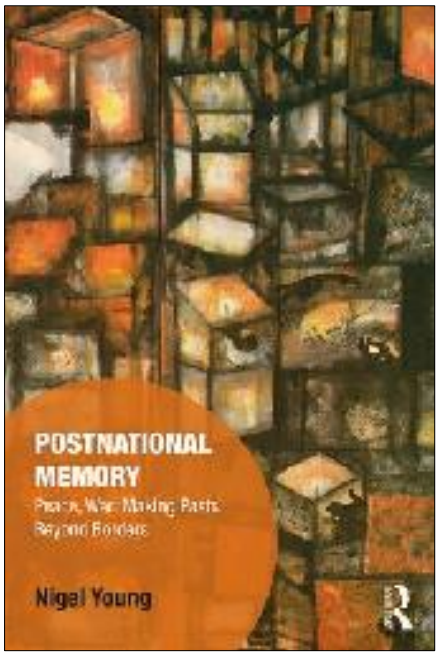
この学際的な書籍の編者（クリスチャン・フィリップ・ピーターソン、ウィリアム・M. ノブロック、マイケル・ローデンサール）は「この論集の読者が、1750 年以降の世界中での平和を達成しようとする試みに関する地域の特定な時期の事例研究はもちろん、学術的な観点の多様性も学ぶことができるように」という希望を表しています。34 の小論は 6 つのテーマにより分けられています。(1) 平和の方法論(2)平和の象徴的人物（例：トルストイ、ガンジー、M. L. キング、ラッセル、マンデラ）(3)平和の宗教的、文化的側面(4)反核平和行動主義 (5)非暴力と民族国家（例：コロンビア、アイルランド、レバノン、パレスチナ、台湾海峡） (6)現代の挑戦：国家を超えた国際的な平和への努力（フェミニストの将来の展望を含む）



この書籍はおよそ 500 ページあり、主に 20 世紀を扱っています。平和と紛争に関して研究するために歴史的なアプローチと社会科学的なアプローチの橋渡しをすることを目指しています。

同じ出版社、ラウトレッジ社が豊富に実例を挙げて説明しているナイジェル・ヤングの書籍『国家主義後の記憶－平和、戦争：過去に国境を越えさせること』をもうすぐ出版しようとしています。その中の一章は平和博物館について書かれています。こちらに click here より詳しい情報があります。

（翻訳：赤松敦子）



(4)ウラジミール・I. イオネソフ 『平和構築活動は本当に平和を作っているのだろうか？』

社会正義ジャーナルの平和に関する論評
（第 30 号　2018 年 4 号, pp. 527-536）

このタイトルからは分かりにくいのですが、この記事は平和博物館についてです。著者は平和博物館が行動と活動への参加のための刺激剤であるべきだと主張しています。そして数ある中で例としてブラッドフォード、デイトン、ウィーンの博物館を挙げています。彼はサマラの平和の文化の国際アーカイブでのいくつかの文化的芸術プロジェクトも紹介しています。また、勇敢な新しい子ども平和博物館のプロジェクト、偏見の根本原因を理解するための博物館も紹介しています。より多くの情報についてはこちら here とこちら here をご覧ください。

勇敢な新しい子ども平和博物館はアトリウム・ソサイエティのプロジェクトです。この団体は 1984 年にカリフォルニア州のオーハイで平和教育者ジーン・ウェブスター・ドイルにより創立されました。この団体は原始的な生物学的な脳から発する心理学的な条件付けがされた意見の、人々を分裂させるような性質について教育的資料と訓練を提供します。そのような脳が個人的、社会的、世界的な紛争の根源だからです。1990 年から今日までこの団体はテレンス・ウェブスター・ドイル博士によって設計された平和プログラムのための教育を創り出し、促進してきました。こちら click here により多くの情報があります。

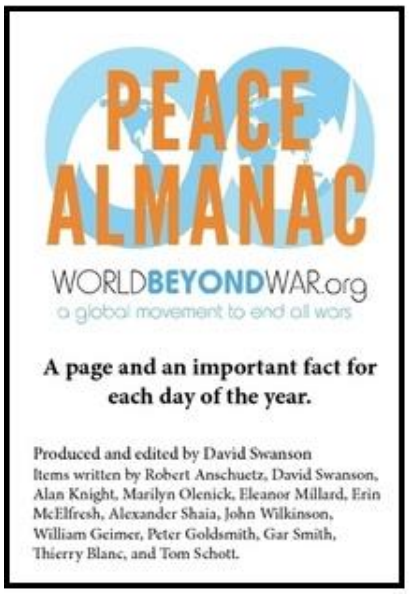
ウラジミール・イオネソフはロシアのサマラ州立文化研究所の文化の理論と歴史部門の教授で部長です。この記事はこちらのリンク this link から読むことができます。またはこちらのメールアドレス（ionesov@mail.ru）で著者と連絡を取ることができます。

（翻訳：赤松敦子）

(5)「戦争を越えた世界」からの新刊

「戦争を越えた世界」の事務局長であるデイヴィッド・スワンソンは 372 ページの『平和年鑑』を制作し、編集しました。その年のそれぞれの日のために 1 ページが書かれており、世界平和のための運動について重要な事実と物語を学ぶことができます。こちら click here により多くの情報と注文に関する詳細があります。

この年鑑はこちらのリンク this link から自由にアクセスでき、PDF 版が 3 ドルでダウンロードできます。



「戦争を越えた世界」によって作られ出版された最も役に立つ包括的で刺激的な 150 ページの図解付きの出版物は、トニー・ジェンキンスによって編集された 2018 年～2019 年版『世界の安全保障システム：戦争の代わりとなるもの』です。こちら click here

にその詳細とPDF版と電子書籍版(少額の寄付で利用可能)があります。

他の「戦争の廃止」に関する資料―書籍、記事、映画、ビデオ、音声記録などを含む広範なリスト(その多くは「戦争を越えた世界」によって制作されています)についてはこちらのリンク this link をご覧ください。

(翻訳:赤松敦子)

編集後記

この通信は、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、山根和代、安斎育郎、キヤ・キムによって編集されました。

また日本語版の翻訳は、赤松敦子さん、寺沢京子さん、山本美穂子さん、山根和代が担当しました。この通信は、INMP の個人と組織をつなぐ重要な場です。また INMP の会員ではない方が世界の平和博物館の活動を知る上で、大変重要です。

以前発行された通信は**INMP の新ウェブサイトで読むことができます。**

http://tinyurl.com/INMPMuseumsForPeace/

INMP の通信は年に 4 回発行されますが、定期的に読みたい方は、メールアドレスを次のメールにお知らせ下さい。inmpoffice@gmail.com

2019 年 12 月に発行される次号に投稿したい方は、2019 年 11 月 15 日までに原稿をお願いします(英文で 500 語以内、日本語の場合 1000 字以内、写真 1-2 枚)。直接英語による原稿を書くことに困難がある場合には、以下の INMP 日本事務局にご相談ください。inmpoffice@gmail.com

INMP コーディネーターのお知らせ

INMP の会費と寄付をお願いします

INMP の財政はみなさまの会費と寄付によって成り立っています。私たちは来年 9 月 16-20 日に第 10 回国際平和博物館会議を開催する予定で、しっかりとした財政基盤を築く必要があります。これまですでに会費を支払った方には感謝申し上げます。まだの方は、よろしくお願いします。

ペイパルの方は、次のところに送金して下さい。

INMP PayPal (business account)
Name: INMP OFFICE
INMP email address:
inmpoffice@yahoo.co.jp

そうでない方は下記にご連絡下さい。
inmpoffice@gmail.com

＊日本の方は、次へ振り込むようお願いします。

年会費　2,000 円
※送金先：INMP 郵便局 振込用口座番号 記号 14480 番号 49799181　名前 アイエヌエムピー
他金融機関からの振込の場合　店名 四四八（ヨンヨンハチ）　店番 448
普通預金 口座番号 4979918